

日本語と英語における家族関連語彙の分析(その1)

吉 川 寛*

A Socio-linguistic Analysis of Family Terms in Japanese and English (Part 1)

Hiroshi YOSHIKAWA *

1. はじめに

近年、世界各国で家族の変容が盛んに論じられている。筆者は、現在、中部大学国際関係学部
の4名の同僚と共に共同研究「ことばに表れた家族と家」を継続している。家族や家族構成の研
究は、主として社会学や文化人類学の分野で取り扱われて来ている。我々の共同研究は、日本語
文化圏、英語文化圏、ドイツ語文化圏、フランス語文化圏に限定し、家族に関する問題を社会言
語学的アプローチにより比較対照を試みている。この論文は家族に関連する語を幾つか抽出し、
それらの語の運用に関するアンケート調査を日本および英語圏で実施し、その分析結果を報告す
るものである。今回は日本語の調査結果について述べるに止め、英語圏（主として米国）の調査
結果と総括は次号での執筆を予定している。

2. 方法論

前述したように、家族に関する調査、研究は主として社会学関連の分野で行われ、その主要な
調査方法の一つはアンケート調査である。アンケートの質問事項については非常な推敲がなされ
て分析の精度を高める努力がなされている。しかし、一般的に言って、インフォーマントは自分
の回答に対する影響や、率直な自己表象に対するためらいなどから、いわば、フィルターをかけ
た回答を行う場合も往々にして見受けられる。そのようなフィルターの存在が正確に把握されて
いればそれはそれなりに意味のある資料になりうる。しかし、インフォーマントの数が多い場合
は個々のインフォーマントの特性を把握するのは難しく、回答結果を機械的に取扱わざるを得な
いのが実情である。言語は文化所産の一つであるので、その言語文化圏の特質を当然内蔵してい
るはずである。言語には意味的制約や統語的制約が多く存在し、それらに違反すれば意思の疎通
を欠くことになるので従わざるを得ない。例えば、日常会話に見られる文一つをとって見ても、
話者は、語の選択や文法構造を一つ一つ時間をかけて吟味しているのではなく、言語直感による

*外国語系列 (Department of Foreign Languages)

即時的判断を行っている。このような言語制約を利用したアンケートはストレートな認識の表出が期待できる。つまり、インフォーマントが生きてきた文化圏での経験所産が無意識に表れると想定され、前述のフィルター現象が比較的現れにくいと考えられる。このように、言語の直感に訴えるアンケート調査は客観性があり精度も高い。言い換えれば、より近く実体に迫ることが可能であろう。今回使用したアンケートは、このような観点から作成したものである。⁽¹⁾

3. 調査方法

それぞれの文化背景の異なる日本語圏と英語圏では、家族の変容と言っても自ずと形態も違ってくる。各言語圏で、家族の変容を的確に投映できるようなキーワードとしてどのような語を選択するかは大きな問題である。具体例を挙げると、ある小学校で配布された保護者あてのプリントに、今回のアンケートにも利用した次の1文があった。

「台風時の登校に関しましては、状況に応じて連絡いたしますので御家庭で待機させて下さい。」(下線は筆者)

子供を家に留めておけと言う意味だが、その中での＜家庭＞の語の使用は興味深い。「待機」させるのであるから具体的空間でなければならないが、＜家庭＞にはそのような意味特性があるのだろうか。通常は＜イエ＞や＜ウチ＞の語を使用するが、小学校という公的教育機関があえて＜家庭＞の語を使用したのは何か意図があるのか。このような文一つをとっても多くの示唆に富む。以上のようなことや、これまでの共同研究の経験から、日本語では＜家庭＞、＜家族＞、＜家（イエ）＞、＜家（ウチ）＞の4語を選び、英語では＜family＞、＜house＞、＜home＞の3語を選択した。そして、後出のアンケートを作成し、これらの語を選択枝とした中からどの語を選択したかの傾向からそれぞれの文化圏における家族、家族関係、あるいは広く人間関係の実情にアプローチするものである。

日本語においては198名のインフォーマントにアンケート調査を実施した。インフォーマントは性差と世代差に主眼を置き、一般成人女性、一般成人男性、女子大学生、男子大学生の4つに大別した。⁽²⁾ また、アンケートの40の質問事項に関して、それぞれの質問が意図している意味特性を次の12に分類した。また、それぞれに該当する質問文の番号を（ ）に示した。⁽³⁾

1. 規範性：規範的、教育的意味特性が包含されているかどうか。(26, 34, 36)
2. 空間性：空間、場所の含意があるか。(3, 5, 10, 13, 21, 33)
3. 肯定性：肯定的に良いものとして捉えているか。(22, 37)
4. 否定性：肯定性の逆。(9, 14, 16)
5. 単位性：国や社会のような公的なものに対峙するような単位として捉えているかどうか。
(4, 8, 17, 23, 28)
6. 連続性：連続したり反復したりすることが可能か。(15, 20, 24)
7. ジェンダー：文化的な観点からの性区別があるか。(12, 27, 35, 39)

8. 集団性：数量的な大小で存在が左右されるか。(11, 18)
 9. 帰属性：自己がどのような集団あるいは組織に組み入れられているかと判断するか。(29, 30, 32)
 10. 創造性：創造したり破壊したりできるか。(6, 40)
 11. 私性：私生活の場であるかどうか。(1, 25, 31)
 12. 人間性：人の介在が暗示されるかどうか。(2, 19, 38)
- 次に具体的な分析結果について述べる。

4. 全体的傾向

インフォーマント全員の語選択の傾向を示す表（1）から次のことが言える。まず、＜家庭＞の選択率が突出して高い。12の意味特性のうち、創造性、肯定性、私性、単位性、規範性、ジェンダーの6項目で1位となっている。特に、創造性、肯定性、私性では抜きん出ている。以上の事は、全体的に質問文の内容自体が＜家庭＞を選択しやすいものが比較的多いことも影響しているが、注目に値する。詳しくは個々の章で述べる。次に＜イエ＞と＜ウチ＞は全体的によく似た傾向を示している。吉川（1986）やYoshikawa & Yamada（1986）でも同様な結果を得ている。空間性と否定性ではこれらの2語で二分していると言ってもよいだろう。特に相違点を挙げれば、連続性と帰属性で＜イエ＞の方が高い選択率を示している。これも個々の章で述べるが、日本の伝統的な家制度の名残と言えよう。＜家族＞は、推定される意味機能から人間性で高い選択率を示すのは当然と言えよう。しかし、予想以上に選択率が低い。選択されにくいと思われる空間性を除外しても依然として4語のうちで最低である。＜家族＞の語が有する意味範疇が比較的限定されているとの予見が可能である。

社会学関連の分野では＜家族＞は学術用語であり研究対象とされているが、＜家庭＞はそのような扱いをされておらず、研究対象とは考えられていないようである。以上のアンケート結果から見ても、＜家庭＞の分析を抜きにして家族問題は語れないのではないだろうか。

5. ＜家庭＞について

＜家庭＞は表（1）では創造性が93.2%の高率を示している。各グループ別の表（2 a）を見ても、性別、世代別にかかわらず同じような選択率である。該当する質問文（6, 40）から分かるように、婚姻に代表される男女一組の動向によって＜家庭＞が作られたり壊されたりすることになる。＜新婚家庭＞に代表されるように結婚イコール家庭の創造という連想が定着している。近年の結婚率の低下にも関わらずそのような意識は依然として高いようだ。結婚という肯定的な行為からの連想と戦前における暗いイメージの家父長的家制度から戦後の核家族による“民主的”家庭への転換（実際は戦前から＜家庭＞の語はよく使用されていて機能していたし、戦後に家制

全体の選択率（単位％）

意味特性	家庭	家族	家(イエ)	家(ウチ)	該当する質問文
規範性	68.9	12.9	11.4	5.6	26,34,36
空間性	21.3	1.0	45.4	36.9	3,5,10,13,21,33
肯定性	75.4	2.5	13.0	4.6	22,37
否定性	15.7	2.1	42.5	43.5	9,14,16
単位性	51.7	32.6	6.6	2.4	4,8,17,23,28
連続性	4.9	3.4	77.7	12.8	15,20,24
ジェンダー	59.1	30.0	10.3	3.6	12,27,35,39
集団性	24.1	12.3	46.4	22.4	11,18
帰属性	0.5	7.5	62.7	39.4	29,30,32
創造性	93.2	4.1	5.4	2.0	6,40
私性	70.1	4.8	11.1	18.0	1,25,31
人間性	12.3	65.3	18.5	6.1	2,19,38

表（1）

度的土壌が払拭されたかは疑問であるが今回はこれらの問題には触れない）などに起因して＜家庭＞の肯定性や私性を育み、高い選択率を生み出したと考えられる。しかし、世代別を示す表（3 a）の肯定性を詳しく見ると、大学生と一般成人とではかなりの差が認められる。大学生の方が14%も高い。逆に、表（2 a）の否定性では一般成人が相対的に高く、特に一般女性が22.2%と一際高い。これらのことから、若い世代では＜家庭＞にある種の夢を抱いているが、現実には家庭を持った一般、特に女性は、少数派ではあるが、家庭のマイナス面を実感として意識している層があることは注目に値する。

＜家庭＞が肯定的であるとの意識から、質問文（34）のような例で77.0%の高率であったように、規範性、教育性を具備していると思うのは自然な流れであろう。しかし、表（3 a）で見られるように、＜家庭＞に規範性や教育性の意味特性を意識する大学生は58.4%で一般成人は79.5%でその差は21.1%である。特に、男性大学生は、表（2 a）にあるように、49.5%と約半数である。これは管理する側と管理される側との意識の差であろう。さらに規範で注目されるのは、＜家庭科＞、＜家庭訪問＞のような表現や質問文（5）、（36）に見られるように、初等及び中等教育機関では好んで＜家庭＞の語を用いる傾向が伺えることである。これらの公的教育機関は、＜家庭＞を連絡や指示の受け皿と見なし、最下部の教育機関への組み込みを意図的に行っていると思われる。そうであるとするならば、＜家庭＞は制度上あるいは政策上の公用語であると言えるだろう。

＜家庭＞をジェンダー、特に女性と関連付けるインフォーマントが59.1%と多い。また、表（4 a）見られるように、男性が女性より高率であることも興味深い。女性、特に一般女性が51.9%と最も低く、前述の否定性で一般女性が高率であったことと平行している。

私性でも70.1%と選択率は高い。ここでは女性の方が男性よりも10%弱高い。女性自身に家庭が女性の定位置であるとの意識がある（あるいは持たされてきた）のだろうか。そうであるとすれば、女性にとって家庭が肯定的な存在である方が望ましいので、女性の肯定性の高率の理由説明になる。また、私性における女性の高率は、家庭における滞在時間の多さを意味する。母親と

しての子供との接触時間が父親のそれより長いので、女性に子供の教育や躾を行うことが期待される。このような期待感を女性も感じとり規範性での女性側の高率となって表れて来ていると解釈できる。

空間性は高率とは言いがたい。＜家庭で寝る＞や＜家庭で食べる＞のような表現がまだ市民権を得ていない（特に女性が抵抗を示す）ことから自然な結果と言える。しかし、質問文（10）で＜家庭＞が76.9%の高率であったことは、今後＜家庭＞の意味特性に空間性が加わる可能性を示唆しているのではないだろうか。

連続性では＜家庭＞は極めて低率である。家庭は一代限りだとの認識である。1ないし2名の小人数集団でも成立するかを問う集団性では高率とは言い難いが、表（1）の24.1%は筆者の予想を越えていた。質問文（11）にあるような＜一人暮らしの家庭＞を一般男性で5人に1人が是としている。いわゆる核家族（夫婦と2, 3名の子供）が典型的な家庭の中身であるという既成の認識がすこしずつ変化してきていると思われる。

帰属性の選択率はほとんどゼロに近い。対照の極にある創造性の突出した高率と表裏一体をなすと言える。＜家庭＞は自らが結婚によって作り出すものであり、子供として親に養育されている時は、親の＜家庭＞に同居しているのではなく、親の＜イエ＞や＜ウチ＞や＜元＞で暮らしているとの認識である。結婚によって始まった＜（自分の）家庭＞は、子供の誕生そして巣立ちでまた老人夫婦の二人だけになった時終わるのか、あるいは、その後の配偶者の死によって一人暮らしになった時に終わるのか、あるいは、死または他の＜家庭＞との同居で終わるのかは人それぞれで異なり、まだ確定はしていないと考えられる。複数の世代が同居するいわゆる「サザエさん型同居家族集団」は一つの＜家庭＞なのか、あるいは複数の＜家庭＞の混在なのかも定まっていないと思われる。

以上述べてたように、＜家庭＞の内容認識の揺れや＜家庭＞の誕生から終焉までの認識の揺れ
＜家庭＞の選択率（単位％）

意味特性	男子大学生	女子大学生	一般男性	一般女性	該当する質問文
規範性	49.5	67.2	75.0	84.0	26,34,36
空間性	15.4	21.1	25.8	22.8	3,5,10,13,21,33
肯定性	78.9	85.8	66.3	70.4	22,37
否定性	12.5	12.9	15.0	22.2	9,14,16
単位性	44.1	53.7	58.0	51.1	4,8,17,23,28
連続性	8.3	3.0	5.8	2.5	15,20,24
ジェンダー	66.0	58.6	60.0	51.9	12,27,35,39
集団性	22.7	23.9	31.3	18.5	11,18
帰属性	2.1	0	0	0	29,30,32
創造性	95.3	92.5	92.5	92.6	6,40
私性	62.5	73.1	68.3	76.5	1,25,31
人間性	13.0	14.4	10.8	11.1	2,19,38

表（2 a）

世代別＜家庭＞の選択率（単位％）

意味特性	大学生	一般成人	該当する質問文
規範性	58.4	79.5	26,34,36
空間性	18.3	24.3	3,5,10,13,21,33
肯定性	82.3	68.4	22,37
否定性	13.8	18.6	9,14,16
単位性	48.9	54.6	4,8,17,23,28
連続性	5.7	4.2	15,20,24
ジェンダー	62.3	56.0	12,27,35,39
集団性	23.3	24.9	11,18
帰属性	1.1	0	29,30,32
創造性	93.9	92.6	6,40
私性	67.8	72.4	1,25,31
人間性	13.7	11.0	2,19,38

表（3 a）

男女別＜家庭＞の選択率（単位％）

意味特性	男性	女性	該当する質問文
規範性	62.3	75.6	26,34,36
空間性	20.6	22.0	3,5,10,13,21,33
肯定性	72.6	78.1	22,37
否定性	13.8	17.6	9,14,16
単位性	51.1	52.4	4,8,17,23,28
連続性	7.1	2.8	15,20,24
ジェンダー	63.0	55.3	12,27,35,39
集団性	27.0	21.2	11,18
帰属性	1.1	0	29,30,32
創造性	93.9	92.6	6,40
私性	65.4	74.8	1,25,31
人間性	11.9	12.8	2,19,38

表（4 a）

がどのように定着するか予測は困難である。しかし、現在我々の多くが継続している家庭をイメージではなく、プラス面もマイナス面も含め出来るだけ正確に実態として捉えることが先ず必要であろう。

6. ＜家族＞について

表（1）に示されているように、＜家族＞は人間性で65.3%と高率を示している。特に、質問文（19）は、71.6%と高い選択率であった。＜家族＞の基本的意味だが「血縁と婚姻による人間

集団」と考えられるので当然の高率と言える。問題は、それ以外には高い選択率を示している所があまり見当たらないということである。あえて言及すれば、単位性やジェンダーで30%台という比較的高率を示していると言える。これは、常識的に考えれば、＜家族＞とは、婚姻や血縁によって形成され、外界に対峙している結束集団とインフォーマントが認識し、さらに、男性（父親）ではなく女性（母親）が家族生活の運営に直接関与し、家族のマネージャー役であるとしていることの表れであろう。しかし、これらの二つの特性にしても第一位の＜家庭＞に比べれば低率と言わざるを得ない。それ以外は、場所性は除外するとしても、ほとんど考慮に入れるべきものはない。男女別の表（3b）や世代別の表（4b）でも言及すべき顕著な差が見当たらない。あえて挙げるとすれば、規範性で大学生が20.0%であるのに対して、一般成人は5.9%であることだ。これも＜家庭＞同様、管理される側とする側の認識のズレであろう。

以上のことから、＜家族＞はその意味範囲がかなり狭いと考えられる。それ故意味の把握が比較的容易になり、分析すべきファクターの数が少ないだけ一般化もし易いと言える。家族関係や家族構成が専らその研究対象であったのは以上のような取り扱い易さに起因しているのではないだろうか。確かに＜家庭＞のように分析すべきファクターの数が多ければ多いほど分析が複雑になり一般化は困難になる。これは言語学での文文法と談話文法との対照的な研究姿勢の相違に似ている。しかし、どちらが正しいとか優先すべきとかは決められない。両様のアプローチが必要であろう。

＜家族＞の選択率（単位%）

意味特性	男子大学生	女子大学生	一般男性	一般女性	該当する質問文
規範性	24.0	15.9	9.2	2.5	26,34,36
空間性	0.3	0	1.7	1.9	3,5,10,13,21,33
肯定性	5.5	3.0	1.3	0	22,37
否定性	4.2	2.0	0.8	1.2	9,14,16
単位性	40.0	33.1	31.5	25.9	4,8,17,23,28
連続性	3.6	2.0	4.2	3.7	15,20,24
ジェンダー	24.2	28.0	33.1	37.0	12,27,35,39
集団性	6.3	10.4	17.5	14.8	11,18
帰属性	0	1.0	0.8	1.2	29,30,32
創造性	4.7	2.2	3.8	5.6	6,40
私性	3.1	4.0	5.8	6.2	1,25,31
人間性	67.7	61.2	63.3	69.1	2,19,38

表（2b）

世代別＜家族＞の選択率（単位％）

意味特性	大学生	一般成人	該当する質問文
規範性	20.0	5.9	26,24,36
空間性	0.2	1.8	3,5,10,13,21,33
肯定性	4.3	0.7	22,37
否定性	3.1	1.0	9,14,16
単位性	36.6	28.7	4,8,17,23,28
連続性	2.8	4.0	15,20,24
ジェンダー	26.1	35.1	12,27,35,39
集団性	8.4	16.2	11,18
帰属性	0.5	1.0	29,30,32
創造性	3.3	4.7	6,40
私性	3.6	6.0	1,25,31
人間性	64.5	66.2	2,19,38

表（3 b）

男女別＜ウチ＞の選択率（単位％）

意味特性	男性	女性	該当する質問文
規範性	6.6	5.1	26,34,36
空間性	35.6	38.3	3,5,10,13,21,33
肯定性	7.2	2.1	22,37
否定性	41.7	45.4	9,14,16
単位性	2.1	2.7	4,8,17,23,28
連続性	11.7	13.9	15,20,24
ジェンダー	4.3	3.0	12,27,35,39
集団性	20.4	24.8	11,18
帰属性	33.1	45.7	29,30,32
創造性	1.9	2.1	6,40
私性	21.9	14.1	1,25,31
人間性	7.0	5.1	2,19,38

表（4 d）

7. ＜家（イエ）＞について

表(1)に見られるように、連続性77.7％、帰属性62.7％の意味特性がかなりの高率である。前近代的な日本では、家制度に代表されるような家族システムでの家督の継承が一番の関心事であった。そのような以前の状況の名残で＜イエ＞の連続性が意識されるのであろう。帰属性が高いことは＜家庭＞の章で述べたが、自分の＜家庭＞を作るまでは親の＜イエ＞に属していると認識しているインフォーマントが最も多い。しかし、帰属性は表（4 c）に見られるように男女差がある。男性のほうが女性より12.8％選択率が高い。＜ウチ＞の章でも述べるが、＜ウチ＞も帰属性

に関しては比較的高率であるが、女性が男性より12.6%高く、＜イエ＞の場合の逆になっているのは興味深い。特に、一般女性は、親の元を出るまでの帰属先を親の＜イエ＞とする者と＜ウチ＞とする者がほぼ2分される。男性の＜イエ＞に対する共感の家父長的家制度の影響であろうか。

さらに興味深いのは、否定性で＜イエ＞と＜ウチ＞ではほぼ全体を2分していることである。否定性に関わる質問文の3文のうち2文は統語上＜家族＞が選びにくいので、実質的には他の3語から選ぶことになる。しかし、＜家庭＞の章で述べたように、＜家庭＞は肯定性や規範性の意味特性を有していると大多数のインフォーマントが意識しているので選びにくい。従って、＜イエ＞や＜ウチ＞に否定性があると積極的に選んだのではなく、結果としてそのようになったと推定できる。

集団性で比較的高率であることから、＜イエ＞は中の人数は、特に限定されないようである。

全体的に言って、世代差はあまり表れていない。あえて挙げれば、質問文（7）で＜イエ＞を選んだ大学生が15.3%、一般成人が26.7%と2桁台の差が出ていることである。同じ質問文で＜家庭＞を選んだ大学生が53.5%で一般成人が42.2%と反対の結果が出ていることと考え併せると、生活の場は若い世代では＜家庭＞で、古い世代では＜イエ＞ということになるのであろう。

＜イエ＞の選択率（単位%）

意味特性	男子大学生	女子大学生	一般男性	一般女性	該当する質問文
規範性	14.1	9.0	12.5	9.9	26,34,36
空間性	49.7	44.3	43.8	43.8	3,5,10,13,21,33
肯定性	16.4	11.2	15.0	9.3	22,37
否定性	46.4	41.3	47.5	34.6	9,14,16
単位性	6.3	7.8	5.0	7.4	4,8,17,23,28
連続性	72.4	76.6	76.7	85.2	15,20,24
ジェンダー	8.2	10.4	11.3	11.1	12,27,35,39
集団性	46.1	47.0	50.0	42.6	11,18
帰属性	68.2	55.7	70.0	56.8	29,30,32
創造性	6.3	4.5	5.0	5.6	6,40
私性	10.9	9.5	14.2	9.9	1,25,31
人間性	15.6	16.4	25.8	16.0	2,19,38

表（2c）

世代別<イエ>の選択率 (単位%)

意味特性	大学生	一般成人	該当する質問文
規範性	11.6	11.2	26,34,36
空間性	47.0	43.8	3,5,10,13,21,33
肯定性	13.8	12.2	22,37
否定性	43.9	41.1	9,14,16
単位性	7.1	6.2	4,8,17,23,28
連続性	74.5	81.0	15,20,24
ジェンダー	9.3	11.2	12,27,35,39
集団性	46.6	46.3	11,18
帰属性	62.0	63.3	29,30,32
創造性	5.4	5.3	6,40
私性	10.2	12.1	1,25,31
人間性	16.0	20.9	2,19,38

表 (3 c)

男女別<イエ>の選択率 (単位%)

意味特性	男性	女性	該当する質問文
規範性	13.3	9.5	26,34,36
空間性	46.8	44.1	3,5,10,13,21,33
肯定性	15.7	10.3	22,37
否定性	47.0	38.0	9,14,16
単位性	5.7	7.6	4,8,17,23,28
連続性	74.6	80.9	15,20,24
ジェンダー	9.8	10.8	12,27,35,39
集団性	48.1	44.8	11,18
帰属性	69.1	56.3	29,30,32
創造性	5.7	5.1	6,40
私性	12.6	9.7	1,25,31
人間性	20.7	16.2	2,19,38

表 (4 c)

8. <家 (ウチ)>について

今回のアンケートでは<ウチ>が選ばれるのが予想以上に少なかった。これは質問文の大多数が文語文であったことが原因の一つと思われる。その証拠として、質問文(3)は口語文であるが<ウチ>の選択率は73.0%と飛び抜けて高いことが挙げられる。空間性や否定性も<イエ>とよく似た選択率となっている。<ウチ>も<イエ>と同様、あまり規律が厳しくなく、外に対する内なる空間と認識されていることになる。<イエ>との唯一の相違は連続性である。<ウチ>が極めて低率なのは、時間を越えた一族の内なる公的な場である<イエ>と異なり、<ウチ>は

一代限りの個人的な存在なのであろう。連続性に関しては吉川（1986）や Yoshikawa & Yamada（1986）で詳しく述べたので、ここではこれ以上言及しない。

前の章でも述べたが、表（4 d）に見られるように、帰属性で＜ウチ＞を選んだ女性が男性より12.6%多い。全体としては＜ウチ＞（＜イエ＞もそうだが）の選択率は男女よく似た割合になっているが、帰属性だけが異なっているのは、理由は分からないが興味深い。更に、表（3 d）にあるように、世代差も見受けられる。女子大学生と一般男性にも差がないので、この世代差は男子大学生50.6%と一般女性28.6%との差によって作り出されている。女性で、世代が古くなればなるほど＜ウチ＞に共感をしめすことになる。今回は、インフォーマントの地域差を検討要素に入れるだけの数量と地域の公平化が不十分であるので正確なことは言えないが、西日本のインフォーマントが＜ウチ＞を好む傾向が見受けられる。関西地域で女性の一人称に＜うち＞が使用されていることと関連があるかもしれない。さらなる詳しい調査と検討が必要である。

＜ウチ＞の選択率（単位%）

意味特性	男子大学生	女子大学生	一般男性	一般女性	該当する質問文
規範性	7.8	6.5	4.2	3.7	26,34,36
空間性	36.5	37.1	34.6	39.5	3,5,10,13,21,33
肯定性	5.5	2.2	8.8	1.9	22,37
否定性	41.7	46.3	41.7	44.4	9,14,16
単位性	2.2	3.9	2.0	1.5	4,8,17,23,28
連続性	15.1	17.9	15.8	9.9	15,20,24
ジェンダー	3.5	4.1	5.0	1.9	12,37,35,39
集団性	25.8	25.4	15.0	24.1	11,18
帰属性	28.6	40.8	37.5	50.6	29,30,32
創造性	0	2.2	3.8	1.9	6,40
私性	24.5	15.9	19.2	12.3	1,25,31
人間性	7.3	6.5	6.7	3.7	2,19,38

表（2 d）

世代別<ウチ>の選択率 (単位%)

意味特性	大学生	一般成人	該当する質問文
規範性	7.2	4.0	26,34,36
空間性	36.8	37.1	3,5,10,13,21,33
肯定性	3.9	5.4	22,37
否定性	44.0	43.1	9,14,16
単位性	3.1	1.8	4,8,17,23,28
連続性	16.5	12.9	15,20,24
ジェンダー	3.8	3.5	12,27,35,39
集団性	25.9	19.6	11,18
帰属性	34.7	44.1	29,30,32
創造性	1.1	2.9	6,40
私性	20.2	15.8	1,25,31
人間性	6.9	5.2	2,19,38

表 (3d)

男女別<家族>の選択率 (単位%)

意味特性	男性	女性	該当する質問文
規範性	16.6	12.6	26,34,36
空間性	1.0	1.0	3,5,10,13,21,33
肯定性	3.4	1.0	22,37
否定性	2.5	1.6	9,14,16
単位性	35.8	29.5	4,8,17,23,28
連続性	3.9	2.9	15,20,24
ジェンダー	28.7	32.5	12,27,35,39
集団性	11.9	12.6	11,18
帰属性	0.4	1.1	29,30,32
創造性	4.3	3.9	6,40
私性	4.5	5.1	1,25,31
人間性	65.5	65.2	2,19,38

表 (4b)

9. その他の特徴

インフォーマントを4グループに分けたが、それぞれのグループ間の選択率を比較してみると、特に目立つのは、男子大学生と一般女性の対立が多く見られることである。40の全質問文で<家庭>を選んだ割合をグループ間で比較すると、8文で男子大学生と一般女性の2グループで最高率と最低率を、つまり男性大学生が最高率の時は一般女性が最低率を、あるいはその逆、を示している。同様に<家族>では5文、<イエ>では3文、<ウチ>では5文であった。合計21文となり、他のグループ間ではせいぜい数文であるのとは対照的である。日本では、家族の中で母親

と息子の関係が最も問題であり難しいと言われているが、上述の意識のズレがこのことを傍証している。

男子大学生のインフォーマントは理工科系と文科系の数はほぼ同数であったが、専攻別による差はほとんど見られなかった。女子大学生は、所属が女子大学と共学でほぼ半数であったが、これもあまり差がなかった。あえて挙げれば、＜イエ＞の選択率が女子大学の学生は25.6%。共学の女子大生は29.3%であるが、＜ウチ＞では女子大で18.9%、共学で16.4%と、顕著な差ではないが、逆になっている。共学の方が＜イエ＞を好み、女子大の方が＜ウチ＞を好むことになる。しかし、地域差なども考慮に入れなければならないので、このような差で何かを言及することが有効かどうかは断定できない。今後の課題である。

アンケートは、4語に該当する語がない場合には適当と思われる任意の語を書き入れるようになっている。その中で比較的多数なものだけを示すと以下のようである。質問文（2）で＜社会＞が7名、質問文（4）で＜(両)親＞が24名、質問文（4）で＜自宅＞が8名、質問文（28）で＜家計＞が10名、質問文（34）で＜家計＞が9名である。特に、質問文（4）で、＜(両)親＞が24名（12.1%）もあることは無視できない。

10. まとめ

今回の調査で最も注目すべきは＜家庭＞の選択率の高さである。また、＜家庭＞は意味機能も多様である。特に、創造性、肯定性、私性、規範性、ジェンダーで高率である。これは、帰属性、否定性、連続性が低率であることと符合している。＜家庭＞の持つ意味特性がかなり特定できたと見えよう。しかし、＜家庭＞の規模、場としての＜家庭＞などについては、まだ未確定である。さらに、教育機関で好んで使用されるように、＜家庭＞が政策公用語的性格を帯びて来ていることには注意を向ける必要がある。また、まだ少数派であるが、女性、特に一般女性が＜家庭＞のマイナス面を指摘しているのは、ジェンダーでの高率と併せて興味深い。反面、女子大学生は、依然として、結婚から家庭の構築という流れを志向しているとの結果である。この格差が今後どのような展開を見せるかも注意を払うべであらう。

次に、余り顕著ではないが、男性が＜イエ＞志向で女性が＜ウチ＞志向、また、若い世代は＜家庭＞志向で古い世代は＜イエ＞志向の傾向がみられる。これらは、＜イエ＞の連続性の高率も含めて、日本の伝統的家制度と無縁ではないだろう。＜イエ＞と＜ウチ＞は、連続性を除きよく似た選ばれ方を示している。しかし、＜ウチ＞は話し言葉に使用されやすい語であるということも分かった。また、＜イエ＞と＜ウチ＞には地域差があるようだが、これは今後の課題としたい。前述したように、次回は英語の家族関連語彙の分析結果と全体の総括を述べる予定である。

32. 結婚して親の(家庭, 家族, イエ, ウチ, ____)をでる。
33. 会社に行かない時は(家庭, 家族, イエ, ウチ, ____)にいる。
34. 子供の教育は学校ではなく(家庭, 家族, イエ, ウチ, ____)が行うべきだ。
35. 彼女は結婚して立派な(家庭, 家族, イエ, ウチ, ____)を持った。
36. 体調を整えて運動会に参加できますよう, (家庭, 家族, イエ, ウチ, ____)でもご留意下さい。
37. 日本の将来を背負って立つような人間は良い(家庭, 家族, イエ, ウチ, ____)から出るものだ。
38. 3世代が共に住む(家庭, 家族, イエ, ウチ, ____)もまだ多い。
39. 彼女は自分が(家庭, 家族, イエ, ウチ, ____)を支えていると思っている。
40. 相手の(家庭, 家族, イエ, ウチ, ____)を壊してまで結婚したいとは思わない。

御協力ありがとうございました。

(2) 各グループの内訳は次のようである。

男子大学生	67名
女子大学生	64名
一般成人男性	40名
一般成人女性	27名

尚, 一般成人のインフォーマントの年齢構成は次のようである。

	男 性	女 性
20代	8 名	2 名
30代	13名	5 名
40代	14名	11名
50代	3 名	5 名
60代	1 名	1 名
70代	1 名	1 名
不明	0 名	2 名

なお, 地域は3名の不明者を除き, 男性は18都道府県, 女性は9都道府県であった。

(3) 質問文(7)は帰属性に入れる事も考えられるが, (29, 30, 32)は成人時における帰属であり, (7)は子供時代の帰属であるので除外した。

参考文献

- (1) Yoshikawa, H. and Yamada, N. 1986. A Contrastive Analysis of Some Expressions of Space and Place. *Cross-Cultural Communication: East & West* Samji Pub. Seoul
- (2) 上子武次(編) 1981. 『日本人の家族関係』 有斐閣
- (3) 正岡寛司(編) 1988. 『現代家族論』 有斐閣
- (4) 望月 嵩(編) 1988. 『現代家族 日本の社会学4』 東京大学出版会
- (5) 湯沢雍彦 1987. 『図説 現代日本の家族問題』 日本放送出版協会
- (6) 吉川 寛 1986. 「住居表現の日英比較」 中部大学 国際関係学部紀要 第2号
- (7) 吉川 寛(他) 1988. 「ことばに表われた家族と家—その3「住む」」 中部大学 国際地域研究所紀要 第5号
- (8) 吉川 寛 1989. 「<住む>と<live>」 中部大学 国際地域研究所紀要 第5号
- (9) 吉川 寛(他) 1989. 「ことばに表われた家族と家—その4「家」」 中部大学 国際地域研究所紀要 第6号